

聖書翻訳プロジェクトを終えて

佐藤裕子

2018年12月10日に31年ぶりに『聖書 聖書協会共同訳』が刊行された。2011年から新翻訳プロジェクトに日本語担当翻訳者兼編集委員として参加した者として、いくつか気づいたことを記したい。

今回の翻訳の大きな特徴として、聖書協会世界連盟が中心となって進めた「パラテキスト」という翻訳ソフトの開発により、前回の新共同訳聖書の時と比べて、原語担当翻訳者・日本語担当翻訳者とのやりとりが格段にスピードアップされたこと、並行箇所統一、訳語の統一が容易になったことの三点が挙げられる。さらにこの「パラテキスト」は、いつ、どの段階で、誰が修正を入れたのかが一目瞭然で、翻訳された文章がどのように変化していくのか、その過程の記録を残すことが可能となり、〈次の世代への引継ぎ〉という意味でも重要な役割を担っていたと考える。

筆者の専門は翻訳ではないが、文学研究に関わる者として、一つのテキストを別の言語に置き換えてゆく翻訳という作業において、原文に忠実に直訳するのか、読者の理解を優先して必要に応じて意識するのか、常にこの二つの問題の狭間で揺れ動いていることは、比較的容易に理解することができる。今回の翻訳は、「共同訳事業推進計画諮問会議」が採択した「翻訳方針前文」によれば、「教会の礼拝にふさわしい聖書」「礼拝での朗読にふさわしい、格調高く美しい日本語」を目指している。「格調高い」はともかくとして、「美しい日本語」の「美しさ」については様々に議論が分かれるところではあろうが、原語に忠実なあまり、个性的で風変りな、日本語として収まりの悪い訳文が求められているのではないことは明らかであろう。

当初は、日本語担当翻訳者の仕事として、助詞の正しい選択、自動詞と他動詞の活用形のチェック、文法的な誤りの修正、適切な副詞や形容詞を選択することなど、そのレベルの仕事内容を想定していたのであるが、その予想を超えて、原語担当翻訳者の過去の聖書翻訳の蓄積との差異化を目指す個人的な訳文を、いかに自然で、直訳としても無理のない日本語に変換してゆくか、聖書の日本語表現に深く関わる作業ともなっていた。

そもそも原語担当翻訳者は、旧約聖書学・新約聖書学の権威であり、エキスパートである。31年ぶりの聖書翻訳にあたって、最新の神学研究の成果を今回の聖書翻訳にどのように反映させてゆくかは、原語担当翻訳者に課せられた重要な課題である。今回の翻訳では、同じ書に二組以上の原語担当翻訳者と日本語担当翻訳者が関わっているのであるが、時には対立しながらも、聖書の記述一つ一つの意味を吟味し、最もふさわしい言葉を選んでゆく作業は、スリリングでありながら、聖書を必要とする読者の存在、そしてまた諸教会の信徒が教会での礼拝にふさわしい聖書を求めているという共通の目的によって、支えられていたといえる。

筆者はギリシア語もヘブライ語も正式に学んだことはないが、7年間翻訳作業に携わる中で、ギリシ

ア語は指示代名詞が多いこと、またヘブライ語はコンテクスト重視型の言語であることを学んだ。ギリシア語では『「それ」ってどれ?』『「彼」って誰?』というコントのようなやり取りがしばしば起こった。またヘブライ語がコンテクスト重視型言語であることは、『聖書翻訳』4号の柘暁生氏の論⁽¹⁾に詳しいが、例えば「創世記」第2章第22節「女を造り上げ」の箇所、「造り上げる」と訳される動詞が「バナー」というもので、本来的には「建てる、構築する」の意味であるのだが、「女を建てる」では、文章の構造的意味合いは理解できるが、日本語の文章として適切とはいえない。そこで「女を造り上げる」というコンテクスト（文脈）に最もふさわしい訳語を選ぶことになる。

この点において、先述した「訳語の統一」について、原語と訳語の一対一対応の原則が、コンテクスト（文脈）重視型言語のヘブライ語の特性によって、同じコンテクストにおける訳語の統一の原則は守られているが、最終的には緩やかに幅を持つことになったことも付け加えておきたい。

また今回の新翻訳の目的として「礼拝での朗読にふさわしい」という項目があるが、この点については、朗読者チェック、外部モニターによるチェックが同音異義語や、読点・句点の位置を確認する上でも非常に有効であった。さらに今回の翻訳に脚注がついたことは、二つの意味で重要だと考える。一つは、31年前の『新共同訳聖書』以来、旧約聖書学・新約聖書学の研究の深化・進化の過程を反映させることが可能となったことと、もう一つは我々信徒にとって、たとえそれが現在では正確な訳語ではなくなったとしても、文語訳聖書、口語訳聖書、新共同訳聖書と連綿と引き継がれてきた信仰を支える御言葉を残すという意味においても、納得のゆく処置だからである。

最後になるが、日本近代文学研究者である筆者にとって、聖書は〈文学〉〈物語文学〉である。「聖書一卷によりて、日本の文学史は、かつてなき程の鮮明さをもて、はつきりと二分されてゐる。」⁽²⁾と語ったのは太宰治であるが、聖書に魅了され、強く影響を受けた日本の作家は太宰治だけではない。

森鷗外は『かのように』⁽³⁾という作品の中で、アドルフ・フォン・ハルナックの神学について言及している。ハルナックはドイツの自由主義神学の中心人物で、第一次世界大戦の折、ドイツ皇帝ウィルヘルム二世によるドイツ国民に対する参戦へのメッセージ草稿作成に加わり、戦争を肯定する93人の知識人宣言にも署名した人物である。鷗外は作中、ドイツに遊学している五条子爵の息子、五条秀麿が父にあてた手紙の中で「ウィルヘルム二世とハルナックとの君臣の間柄は、人主が学者を信用し、学者が献身的態度を以て学术界に貢献しながら、同時に君国の用をなすと云う方面から見ると、模範的だ」と語らせているのであるが、鷗外は、秀麿と父に「宗教問題」の核心近くまで踏み込ませておきながら、結局、五条子爵は秀麿に「宗教問題なんぞに立ち入らずに、只委細承知した、どうぞなるべく穏健な思想を養つて、国家の用に立つ人物になつて帰つてくれ」と返信するのである。鷗外が、同時代のドイツ新神学の歴史的背景や教義等の知識を十分に理解しているにも関わらず、深みに入ることはせずにあえて避けて通るという態度を取ったのが分かる。

それに対して英文学者である夏目漱石は、東京帝国大学での講義録『文学論』第一編第三章の中でキリスト教の「神」について、「神」が西洋においてどの時代にあっても人々の拠り所であると同時に、「無限」「絶対」を示す究極の記号（名前はあがるが実態を確認できないもの）であること、キリストは「取もなおさず有限の世より無限の界に進む架け橋」であるとしている⁽⁴⁾。この漱石のキリスト教理解は、上述した『かのように』の中で展開される森鷗外のキリスト教理解と比べると、古代から現代に至るま

で人間の人生において、苦しみを救済する手段としてキリスト教が存在し続けたことを、それ以上でもそれ以下でもないものとして真面目に受容している。まさに漱石のキリスト教理解は〈人間の現実〉に即したものであるといえるだろう。そればかりではない。漱石は、『三四郎』、『門』、『行人』、『道草』、『明暗』の中で聖書の文言を繰り返し引用している。また漱石が愛読していたのは、いわゆるRevised Versionと呼ばれているもので、現在東北大学附属図書館漱石文庫に所蔵されているが、革表紙、小口に金箔のついたA5版の大きさの聖書であった。

芥川龍之介も同様である。芥川の死の枕辺に聖書が置かれていたことは、あまりにも有名であるが、「煙草と悪魔」、「さまよへる猶太人」、「奉教人の死」、「きりしとほろ上人伝」、「黒衣聖母」、「南京の基督」、「神々の微笑」、「おぎん」、「糸女覚え書」、「西方の人」、「続西方の人」等の一連の「切支丹物」と呼ばれる作品群があることも日本近代文学史上、キリスト教と文学の関わりを考える際に、非常に重要な意味を持っているといえるだろう。

筆者は先に聖書が物語文学であると述べたが、旧約聖書においても、新約聖書においても、人は「神」に、今、直面している苦しみについて「何故なのか」と問いかけ、「神」はその問いに対して物語で答えるという話型になっている。人は、何が原因でこのような事態が起こったのか、Causality（因果関係・因果律）^{コーザリティ}について思いを向けることで、現実を受け入れようとするのだ。Causalityとは、Narrative（語り）^{ナラティブ}の基本要素で、因果律を軸としてプロットを組み立ててゆくことなのであるが、因果関係を見ようとする、あるいは因果関係が存在すると考えるのは、世界を理解し、受け入れるための人間の自然な反応である。物語は、人間にとって不可解でランダムな世界を因果律によって再構成する試みともいえる。

あらゆる物語は、全くの空想だとしても、何らかの形で現実を受け入れようとする人間の願望にかかわっている。その中で聖書は、人間にとっての最も深い真実についても、物語に頼らずには理解することができないことを示しているといえるだろう。

【注】

- (1) 柘暁生「脇の問題——創世記2章21-22節のツェラー——」
『聖書翻訳』No.4、2018年7月
- (2) 太宰治「HUMAN LOST」昭和12年4月
- (3) 森鷗外「かのように」『中央公論』、1912年
- (4) 拙著『漱石のセオリー——『文学論』解説』おうふう、2005年12月10日

(さとう・ゆうこ)

フェリス女学院大学文学部教授